

## 徳山藩の焰硝倉について

笹尾 誠

明治維新における防長の軍備体制は、はじめその攘夷思想により培われ、武器の調達も他国からの購入から、逐次自家調達の方法が考えられ、四境戦争から倒幕戦への道を辿る中で、自家製造と備蓄は積極的に行われた。

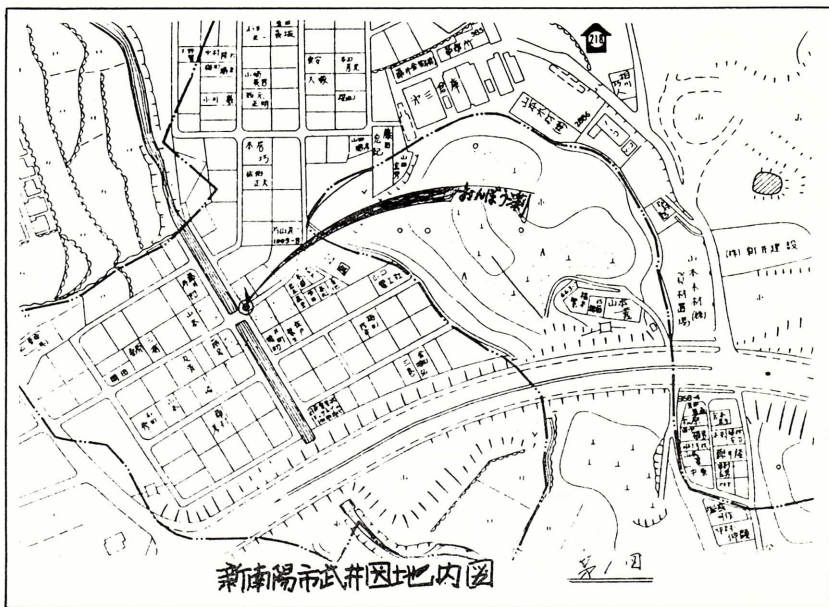
徳山藩においても、萩本藩に劣らず緊急事態への移行は、武器弾薬の生産のためその設備を必要とした。

徳山藩の火薬製造と、火薬庫については、近年の土地開発等のために、遺趾として当時の状況を止めていないが、次のように、かつての所在場所が知られている。

○ 焰硝工場（火薬工場）

徳山市域と新南陽市を流れる富田川を土井から建院院前の支流に遡ると、国道二号線をくぐり小畑地区へ上る。この二号線の北側の川を挟んで新開地の武井団地がある。武井団地を流れる川の中程に、団地の東西を連絡する橋がある。

この附近は昔、おんぼう淵とも云い、この橋から七、八〇米上流に灌漑用の井堰がある。



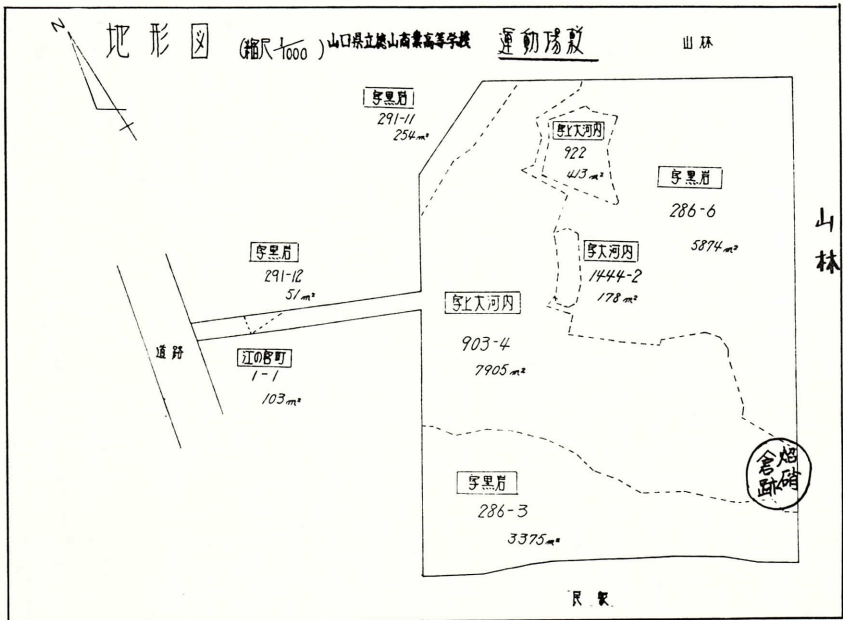
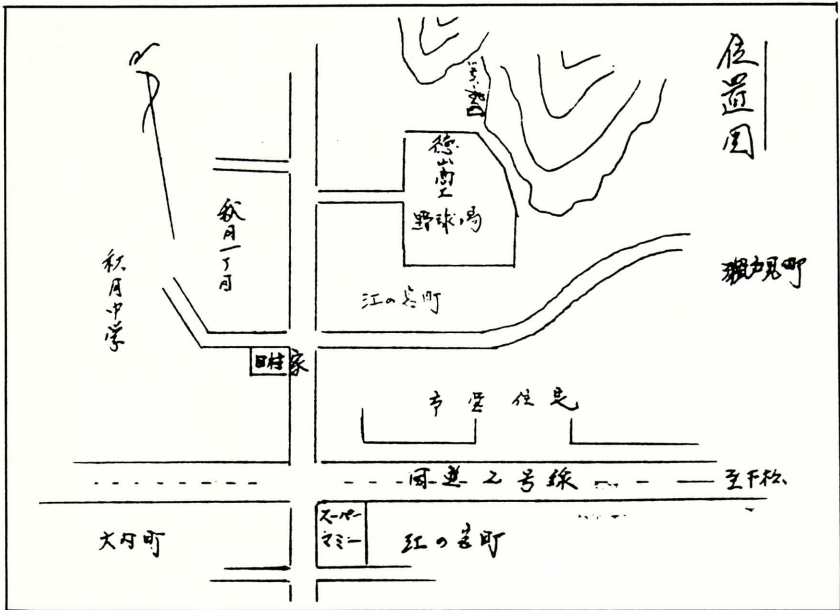
徳山藩の焔硝工場は、このおんぼう淵の東側に在って、井堰から水を引き、火薬原料の粉碎等のため水車が設置され終日廻転していたと云われている。(清木素氏調)

○焔硝作り担当者  
 現富田政所西の小川明氏の曾祖父に小川孫兵衛という人があった、それが担当者であった。

小川孫兵衛は、もともと大工職であったが、その器用さを認められてか、火薬製造の任に当り、苗字・帯刀を許され、本格的に工場を設け、四境戦争の頃は、相当大量の火薬を製造していた。この工場は小川孫兵衛が、許可を得て他出中に爆破焔上してしまつたと伝えられている。その後、工場は再建されなかつた。

○焔硝舎(火薬庫)  
 徳山市周南団地の江の宮町一ノ一の坂を上ると、徳山商業高校の野球場がある。この野球場の敷地は、元おんぼう浴と云われ、地下上申遠石村の項に、「おんぼうが殺されて地下の者が塚を立て、おんぼう塚云々」とあり、然し開発される前は田地があり、また、上の方は畑地であった。浴の奥の方には墓地があり、溜池もあった。

この畑地附近に徳山藩の焔硝倉が設けられていた。(別図2・3のとおり)



。設置の時期

次の状況から、文久の頃から廢藩置県の前までと思われる。

A 徳山市史料によると

イ 宝永七年（一七一〇）、文化五年（一八〇八）鉄砲の稽古させた。

ロ 安政四年（一八五七）、西洋流砲術の稽古をさせた。

ハ 文久三年（一八六三）、西洋流銃陣の訓練場の完成。  
（この頃から隊の編成・銃砲の訓練のことが屢見える。

大砲鑄造のため銅器を献納させる。（文久・元治・慶応へと四境戦から倒幕戦となる。）

B 徳山藩整理の際、焔硝倉は管理者の田村喜左衛門が払いを受け、次男道資の分家するときその納屋として移築した。

。倉の規模

田村家の納屋は、焔硝倉をそのまま移築したものと思われる、三間×四間、十二坪位で、中に区切の壁があり、二室となつて入口も二ヶ所あった。立ち（軒桁までの高さ）は相当高く二間位あった。

。田村家について

元は赤穂城主浅野家に縁りの者で、その断絶後この地方に

移り来て、喜左衛門代は幕末の頃は畔頭を勤め、かの焔硝倉を管理することになった。尤も火薬の出納等は土分の役職であつて、田村喜左衛門は安全管理として水過・火災・盜難等その他を受け持ったと思われる。

田村喜左衛門

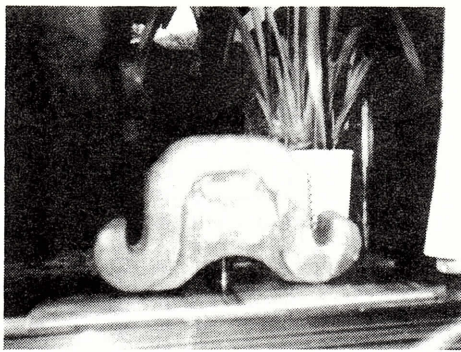
明治六年死

伊勢蔵——茂義——充司

明治三九年六才死

分家

道資——太成——  
親主



焔硝倉の棟瓦



今日に於ては納屋はなく、ただ現主太成氏方に焔硝倉の棟瓦だけが保存されている。

以上は、徳山藩の幕末期に於ける火薬製造所の一端である。工場はおんぼう淵にあり、倉はおんぼう浴に在ったことは、何かの因縁とも思う人もあろうか。（焔硝倉については、田村太成氏の協力による）  
以上